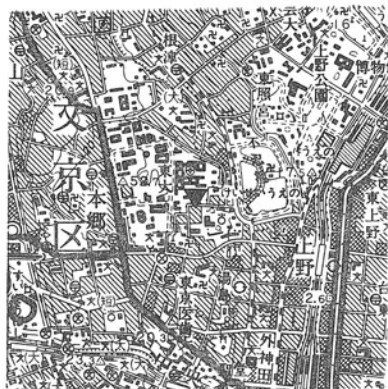


東京・東京大学構内遺跡

(医学部付属病院中央診療棟建設予定地点)

- 1 所在地 東京都文京区本郷
- 2 調査期間 一九八四年(昭五九)一〇月～一九八六年一月
- 3 発掘機関 東京大学遺跡調査室
- 4 調査担当者 藤本 強
- 5 遺跡の種類 屋敷跡
- 6 遺跡の年代 江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(東京東北部)

東京大学本郷構内は、江戸時代には加賀藩をはじめとする大名もしくは旗本の屋敷であったことは周知のことである。本地点は江戸時代のはじめには加賀藩の下屋敷であり、大聖寺藩の成立の後は大聖寺藩の上屋敷として使用されていたところである。本郷台から上野の低地にゆるやかに下る台地の縁にあたる。今回の調査地点の東より幅二〇mほどの沢があり、これは

大聖寺藩の上屋敷成立以降、数度の盛土がなされ埋められている。本調査により、大聖寺藩の上屋敷のほぼ半分を調査しており、多くの遺構が発見されている。代表的なものは、地下式土壇とよばれる一種の穴倉、井戸、廁である。もっとも多いのは種々の用途に使われたと考えられる土壇である。また大聖寺藩と富山藩の屋敷地の境の石組の溝などかなり良好な状態で発見されている。

遺物も多い。上記の種々の遺構が使われなくなった後、ゴミ穴として利用され、そこに多量の廃棄物が投棄されている。陶磁器が中心であり、通常の遺跡の調査による遺物の量と比較すると二桁くらい違うものと考えられる。

江戸時代のもっとも古い遺構の一つに、上述の沢のなかに発見された池がある。一〇m×八mの隅丸三角形をした、深さ二mほどの池である。底は数段になっており、もっとも深いところでは、現地表下六mにおよぶ。形は不整形である。この池から「かわらけ」、木製品が多量に出土した。「かわらけ」は池の西端に折り重なるようにして出土し、木製品はしばらく池の面を漂った後、池の底に沈んだと考えられる状態で池のほぼ全面から出土している。木製品には各種のものがあがるが、そのほとんどが白木の折敷の部分品と白木の箸である。これらの木製品にまじって、図に示すような墨書のあ

るものが出土している。
折敷はすべてばらばらになっており、一辺三〇cm前後の足つきの

ものがほとんどであり、一五〇点くらいの数であったものと推測できる。白木の箸は二四〇・二四・五cmのものが大多数であり、一七〇膳ほどが完全に近い形で採集できている。「かわらけ」は総重量七〇kgほどある。復元したところでは、六五〇点ほどの総数であったと考えられる。これらはほとんどが形作りされたものと推測される。また、口径・作りなどの特徴から四種類に大別される。口径が一一cm前後、一一・五cm前後、一二cm前後、一三・五～一四・五cmのものである。最後のものは内面に凹線をもつものが多く、受皿的な用途であったのではないかと考えられる。それぞれが一三〇～一五〇点ほどの数である。ほかに多種多様なものが出土しているが、詳細は本報告に譲りたい。図の14の火鑽臼には九個の火鑽痕がある。その痕跡から判断すると、上の火鑽痕は火起しに失敗し、中の中空の火鑽杵を使用し、下の例は同一の孔で二度火起しをしたと推測できる。裏面は火起しの痕跡一例をもち、一寸の目盛のある物差になっている。(火鑽臼については北海道教育大学釧路分校の高嶋幸男氏の御教示を得た)。

白木の箸、折敷、「かわらけ」が池の中からまとまって出ているが、これは一体何を意味しているのであろうか。かなり大規模な儀礼的な宴会の後始末とするのが妥当であろう。

(1)・(2)の木札には「寛永六年」の年紀がみえる。寛永六年(一六二九)の儀礼的な宴会という、四月二六日の將軍家光の御成り

(加賀藩下屋敷への臨邸)、同二九日の前將軍秀忠の御成りが思い起される。加賀藩ではこれに備えてこの前年までに御成書院の新築を終え、国許をはじめ京・長崎・奥羽等全国各地において献上物等の物資を買い求めたと『三壺記』が伝えている。家光・秀忠以下従臣らを饗するため、かなり多量の食物を国許等から取り寄せたことも疑いない。出土した木札がこれらに関係したとする証拠は何もないが、(6)(7)(9)に「雁」「かん」「ます」の文字がみえるように、そのほとんどは魚鳥等の輸送に使われた荷札であると考えられること、また(7)に「高岡」など国許の地名が記されていることからして、そのような考えるのが蓋然性が高いと思われる。

また四種類の「かわらけ」、折敷の数がそれぞれ一五〇を前後する数値を示しているのは単なる偶然ではあるまい。折敷はこの前後の宴会のあり方から推測すると、一人につき二個であった可能性が強い。「かわらけ」は一つの折敷に四個、もう一つの折敷に二個と受皿的に使用するものが二個、一人につき八個の「かわらけ」が使用された可能性がある。こうした推測がもし当たっていると、七〇～八〇人前後の膳部の残りであったとも考えられる。この時の宴会はこれよりはるかに規模の大きなものであったと考えられるので、その後始末の一部をここに捨てたのであろう。今後、種々の観点から詰めていかねばならないことである。推論の上に推論を重ねたが、一つの目安にはなり得よう。

8 木簡の釈文・内容

- (1) ・「」
(穿孔)。三百 拾式
 此
 ・「 寛永六年
(穿孔)。三 井 左衛門
 178×43×7 011
- (2) ・「 七千六百五拾式ノ内五百
(穿孔)。九貫目 あゆハた ×

 ・「 寛永六年
(穿孔)。三月十九日 井 ×
 (180×)(47)×8 019
 (折敷の側板)
 239×27×5 061
- (3) ・「 式拾枚入」
 164×37×4 033
- (4) ・「 式拾枚入」
 167×28×2 033

- (6) ・「 [富カ] [御カ] [柄カ]
 雁九ツ入 220×35×11 032
- (7) ・「 雁九ツ入
 [御カ] [柄カ] 高岡ニ有之 時
 かん拾式入 172×34×7 033
- (8) ・「 南
(穿孔)。間之内 の
 83×52×8 022
- (9) ・「
(穿孔)。ます十五入 105×23×2 021

9 関係文献

- 寺島孝一「東京 東京大学構内遺跡」(『日本考古学年報』三八、四一九八七年)
 東京大学遺跡調査室病院班・山崎一雄「大聖寺藩上屋敷と『古九谷』」(『考古学雑誌』七三・一、一九八七年)
 日置謙編『加賀藩史料』第貳編(一九三〇年)
 (藤本 強・宮崎勝美・萩尾昌枝)

